プラクティカル研究情報の意義と役割

KIAS では、知のインフラ整備を目的のひとつとしている。今後本誌で継続的に取り上げる予定の「プラクティカル研究情報」はその一環である。

ここでプラクティカル研究情報と呼ぶのは、たとえば海外留学手続きの仕方や調査許可のとり方、海外の図書館・研究所の特徴や利用法、開館時間・休館日、書店の品揃えの傾向や開店日時など、研究を行う際に知っていれば役立つ（もしくは知らなければ研究が始められない）事項についての情報である。こういった情報は、実際に現地に長くいればいつか身につくものなのでその重要性を忘れがちだが、誰もが初めて現地を訪れた時には戸惑ったはずのものである。とくに海外留学や調査の初期の段階は、言葉もまだろくにできないうえに、事情も分からないから、図書館で本を一冊借りるのにも大変苦労するものである。こういったことについて、先人たちは自ら試み、失敗し、その積み重ねのなかで必要な情報やコツをつかんできた。何事も自分で経験してこそ身につくことはたしかだが、一人ひとりがこういった手順を一から踏むのはいかにも無駄なことである。

こうした情報が必要になるのは、現地に初めて赴いた人の場合だけではない。たとえある土地に留学していても、帰国後数年たてば記憶は風化するのがふつうだし、短期の調査旅行で訪ねただけの場所であれば余計である。記録した情報があれば、その後の変更点のみに留意すれば、到着当日から研究機関が利用できる。

また、長年同じ現地で研究している人にとっても、プラクティカル研究情報は意味をもつ。なぜなら、研究者が個々に知っている情報にはむらがあるからであり、これらを集積することによって、私たちはより質の高い研究を目指しうるのである。とくに、近年盛んになりつつある学際研究や地域間比較にとっては、このような研究情報の共有がきわめて有効である。

このいわゆるプラクティカル研究情報の必要性は、従来も認識されており、一部ですでに取り組みがなされている。たとえば、東京大学東洋文化研究所のホームページにおける「アジア研究情報ゲートウェイ」（URL:http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/awt.html）などにそれを看てとることができる。本誌のプラクティカル研究情報は、こういった既存の情報と補い合うものである。

KIAS が属する京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科では、すでに実施中の日本学術振興会「魅力ある大学院教育プログラム：臨地教育研究による実践的地域研究者の育成」に加えて、本年度から日本学術振興会受託事業として、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」を始めた。このプログラムは、地域研究のためのプラクティカル・ランゲージを習得させることを主たる目的としている。言い換えれば、語学習得だけで事足れりとするのでなく、現場で当該言語を用いて研究を実践する能力を身につけさせることが究極目標である。このような観点から見ても、ここで取り上げるプラクティカル研究情報の集積は重要である。

基本的に、本誌のプラクティカル研究情報は KIAS のホームページにも掲載される予定である。現地に赴く研究者は、ぜひこれらの情報を持って行き、実地に試して、その便利さを痛感していただきたい。それと同時に、情報が書かれた時点から変わった点を指摘し、日々古くなっていく情報の更新にご協力いただければ幸いである。

お互いに必要な情報を交換しつつ、刺激し合い、切磋琢磨することが学問の進歩につながる。プラクティカル研究情報がそのための一助となることを願う。

（京都大学イスラーム地域研究センター副センター長　東長　靖）